

## 『長谷雄草紙』

——鬼と学者と鬼造美女

リーダー 津野田 典子

『長谷雄草紙』（鎌倉時代末期<sup>1</sup>）は、類まれな美女を死体から作るという、双六好きの鬼や、美女に弱い高名な学者文人の紀長谷雄（845-912）、そして触れられたとたん水になってしまう美女などが登場する、非常に娯楽性の高い作品である。自作の美女を壊されて怒った鬼に襲われそうになる長谷雄が、北野天神のおかげで助かるという北野天神靈験譚であるが<sup>2</sup>、文学史では、教訓的、啓蒙的な要素を含むお伽草子というジャンルに属する。何より、学者文人と鬼の関係や、中世日本人の自然界-超自然界についての視点を垣間見せてくれて面白い。この論文では、1. なぜ鬼が紀長谷雄を選んだのか、2. 不意に凶暴になった鬼と最後に突然現れる北野天神との関係、3. 中世の鬼造-人造人間観、4. ジェンダー、という四点について考えてみる。

### 『長谷雄草紙』 絵巻の要約

ある日、人間の格好をした鬼が紀長谷雄邸に来て、双六の名人である長谷雄と勝負をしたいという。挑戦に応じた長谷雄は鬼の住処の朱雀門に行き、長谷雄が負ければ長谷雄の財産を鬼に渡し、鬼が負ければ絶世の美女を長谷雄に渡すという条件で、ゲームをする。勝負は長谷雄に軍配が上がり、鬼は言葉通り類まれな美女を長谷雄の邸宅に連れて来る。そして女は長谷雄のものだが、100日間は彼女に手を出してはいけないと約束させて去る。それから80日後、長谷雄は我慢しきれず、80日も100日も変わらないだろうと自分で納得して美女に手を出すと、女はたちまち

<sup>1</sup> 脇本十九郎（『文学及び絵巻としての長谷雄双紙』『美術研究』45号 [1935年]、421頁）や、桑原博史（『おとぎ草子』講談社、1982年、243頁）は、鎌倉時代末期とする。梅津次郎は14世紀の始めとし（『解説』角川書店編集部編『日本絵巻物全集』第18巻、角川書店、1968年、8頁）、村重寧は1310～20代とする（『長谷雄草紙』成立と作風』小松茂美編『日本絵巻大成』第11巻、中央公論社、1977年、89頁）。『長谷雄草紙』のテキストは前述、小松茂美編『日本絵巻大成』第11巻、117-119頁を参照。

<sup>2</sup> 徳田和夫『『住吉物語』雑記一室町文芸の視点から』小林健二ほか編『真銅本「住吉物語」の研究』笠間書院、1996年、392-393頁、および「北野社頭の芸能—中世後期・近世初期』『芸能文化史』4号（1981年）、1-22頁参照。

水と化す。長谷雄は驚き嘆くがもう遅い。3カ月後、長谷雄が参内に行く途中、かの鬼が現れ、約束を違えたと言って長谷雄を責める。大いに恐れおののいた長谷雄は北野天神に助けを求めると、空から天神の聲がして鬼は消え去る。美女は屍の良いところを集めて作ったもので、100日経つと魂が入って本当の人間となるはずであった<sup>3</sup>。

## 風流な鬼と交わる学者文人

鬼と交わる人には優秀な学者、文人が多い。『長谷雄草紙』の冒頭に「中納言長谷雄卿は学九流に渡り、芸百家に通じて、世に重くせられし人なり」とあるように、紀長谷雄は名高い学者、詩人である。また、よく知られている文人と鬼の出会いに、都良香（834-879）の話がある。良香が羅生門の近くを「気霽風梳新柳髪」と吟じながら通り過ぎると、良香の詩に感心した羅生門の鬼が下の句を「氷消波洗旧苔鬚」と付けたという（『江談抄』<sup>4</sup>）。詩をよく理解する鬼は良香の詩に無関心ではいられなかったのであろう<sup>5</sup>。『今昔物語集』巻24第24の「玄象という琵琶鬼のためにとらるること」という話も有名で、芸術感覚の鋭い鬼が描かれている。ある種の鬼は音楽や詩などの芸術方面に優れており、似たような嗜好を持つ人々を相手にしばしば姿を見せた。これらの鬼を小松和彦は「風流の才能のある鬼」と呼び<sup>6</sup>、ミシェル・リー（Michelle Osterfeld Li）は“a delightful and relatively gentle bunch”（愉快的、比較的優しいものたち）と言っている<sup>7</sup>。そういう審美眼のある鬼は大体人畜無害で、死体から絶世の美女という芸術作品を作るという点で『長谷雄草紙』の鬼もこの類である。

広田哲通は、『長谷雄草紙』とよく似た話が、天台僧の尊舜（1451-1514）によって書かれた『法華経鷲林拾葉鈔』（1512年）に入っていることを指摘したが、その話の主人公は紀長谷雄ではなく、都良香である<sup>8</sup>。紀長谷雄と都良香の混同は、彼らの漢詩が『和漢朗詠集』に前後して記載されていて、兩人とも鬼と関わる著名な学者であるところから起こったのであろう。徳田和夫が言うように<sup>9</sup>、学問に造詣が

<sup>3</sup> 『長谷雄草紙』の原拠については、黒田彰「長谷雄草紙考：草子と朗詠注」『中世説話の文学史的環境』和泉書院、1987年を参照。

<sup>4</sup> 大江匡房「江談抄」佐竹昭広ほか編『江談抄、中外抄、富家語』岩波書店、1997年、114-115頁。この良香の詩は『和漢朗詠集』「早春」部、紀長谷雄の前出の詩のすぐ前におかれている。良香の詩は菅野禮行編『和漢朗詠集』小学館、1999年、24頁参照。

<sup>5</sup> 馬淵和夫ほか編『今昔物語集』第3巻、小学館、2001年、308-311頁。

<sup>6</sup> 小松和彦「琵琶をめぐる怪異の物語」『妖怪文化研究の最前線』せりか書房、2009年、223頁。

<sup>7</sup> Michelle Osterfeld Li. *Ambiguous Bodies: Reading the Grotesque in Japanese Setsuwa Tales*. Stanford University Press, 2009, p. 117.

<sup>8</sup> 広田哲通「人造人間の説話と論理」新井栄蔵ほか編『叡山の和歌と説話』世界思想社、1991年、169頁。尊舜の長谷雄（良香）譚は『法華経鷲林拾葉鈔』臨川書店、1991年、110-111頁参照。

<sup>9</sup> 徳田和夫「『長谷雄草紙』絵巻と昔話『鼻高扇』」昔話研究懇話会編『視る昔話 昔話：研究と資料19号』、三弥井書店、1991年、16-17頁。

深く、諸々の芸に長けて、鬼と何らかの関係があるという資格さえ備えていれば、長谷雄譚の主人公は別に長谷雄でなくてもよかったのかもしれない。

『長谷寺験記』（13世紀初頭成立）によると、紀長谷雄は、長谷雄の父が長谷寺で観音にお祈りをして授かった観音の申し子である<sup>10</sup>。菅原道真とは同い年だが、道真よりずっと遅く貞観18年（876）に33歳で文章生となった。道真は長谷雄の師の一人で、（自分の門下ではない三善清行を憎み）長谷雄に目をかけ、文章博士になる試験もパスさせた。『江談抄』や『今昔物語集』にある清行の長谷雄に対する言葉に、「無オノ博士ハ古ヨリ今ニ至マデ世ニ無シ、但シ、和主ノ時に始マル也」<sup>11</sup>とある。菅原道真も紀長谷雄も特権上級貴族の家柄ではなく、学者という立場から出世した者同士で、通じるものがあつたのだろう。道真が太宰府に左遷された時も道真は紀長谷雄に絶望の心境を語った詩集『菅家後集』を贈っている。道真と関係が深かったにも関わらず、道真の左遷後も勢力闘争の中を順調に出世しているところをみると、長谷雄はなかなか処世に長けていたようだ。

長谷雄の鬼に関する説話では、『今昔物語集』巻28第29「中納言紀長谷雄の家に顕るる狗の語」<sup>12</sup>がある。長谷雄は「才賢ク悟広クシテ、世ニ並ビ無ク止事無キ者ニテ有ケレドモ、陰陽ノ方ヲナム、何ニモ不知ザリケリ」と紹介される。犬がおかしな行動をするので、陰陽師に聞くと某月某日長谷雄の家に鬼がでるから注意しないとイケないと言われるが、その警告を忘れて学生を呼んで詩会を開く。そこで盥たらいに頭を突っ込んで引き抜くことができない犬を鬼と間違えて、みんなで騒ぐという話で、長谷雄は頭のよい博士ではあるが、「物忌ノ日ヲ忘ルルト云フ、甲斐無フ弊キ事也」と評されてしまう。この説話は、（語り手からみた）長谷雄の陰陽道に対する関心の薄さ、または思慮の浅さを表すもので、読む者の笑いを誘う。それが『長谷雄草紙』の主人公によく似合う。『長谷雄草紙』の主人公の長谷雄は鬼の警告にもかかわらず、絶世の美女に100日になる前に手を出してしまうというように、色欲が知性に勝る。賢いが女の魅力に負けてしまう、というのが凡人じみていて面白い。長谷雄が主人公に選ばれた理由の一つかと思われる。

## 北野天神：守り神、祟り神、菅原道真

通常芸術的な鬼は無害なのに、どうして朱雀門の鬼は急に攻撃的になったのだろうか。これは最後に突然北野天神が出て来るのと大いに関係がある。つまり、北野天神靈験譚の一環として作られた『長谷雄草紙』が、北野天神の靈験を顕すためには誰かを救わなければならない、それで長谷雄が北野天神に加護を求めるための方便

<sup>10</sup> 永井義憲『長谷寺験記』新典社、1978年、27頁。

<sup>11</sup> 『江談抄』のテキストは、脚注4大江前掲書81-82頁参照。『今昔物語集』のテキスト（「三善清行宰相与（と）紀長谷雄口論の語」巻24第25）は、脚注5馬淵ほか前掲書311-312頁参照。

<sup>12</sup> 馬淵和夫ほか編『今昔物語集』第4巻、小学館、2002年、228-230頁。

として鬼が使われたのだろう。それにしても、長谷観音の申し子という長谷雄の出生、それに彼が出世を願うために長谷観音に祈ったということを考えると、北野天神より長谷観音に祈った方が妥当な気がする。しかしこれはよく言われるように、空からくる天神の声は天神信仰の勢力を反映しているのである<sup>13</sup>。

菅原道真是冤罪者や文人の守護神として崇められる前は恐ろしい怨霊であった。小松和彦は天皇や宮廷貴族との関係からいえば、菅原道真というのは「鬼の大將」であると言う。「中央から転落させられて恨みの大鬼になって、天皇家や藤原氏を呪っているわけ」である<sup>14</sup>。道真は藤原時平の讒言にあい、右大臣の地位から太宰権帥に左遷されるが、九州の流罪の地で果てたのち、道真の怨霊は彼を貶めた者達への報復を始める。太政威徳天となり、十六万八千の水火、雷電などの眷属を引き連れ国土に遍満して大災害を行じる<sup>15</sup>。藤原時平を殺し、内裏を焼き、醍醐天皇を死なしめ、大いに恐れられた。永延元年（987）、その死から84年後に、一条天皇が道真に北野天満宮天神という称を贈り、ようやく崇りがおさまったといわれる<sup>16</sup>。楊暁捷は、復讐によって北野天神となった道真だが、13世紀に始まった天神講などが学問の神様としての面を強く押し出し、文人や芸能人を守り、かれらの願いをかなえるという天神の功德を説いたので、道真の文学的才能を評価し、評価された長谷雄が、天神の助けを求めたのは自然の成り行きであるとする<sup>17</sup>。

## 長谷観音の地主神としての北野天神

『長谷寺験記』上巻第11話によると、北野天神は13世紀に長谷寺の地主神、初瀬の町の守護神になっている。天慶9年（946）に北野天神が長谷寺の門前に現れ、当時の長谷寺の地主神、滝蔵権現と会った。天神は無実の罪で太宰府に左遷されたが、悪心を起こして人を傷つけた罪業が深いので、苦患をうけなければならないが、長谷観音の知遇を得て山の一面に社を建て、その苦しみから逃れたいと願う。滝蔵権現はそれに応えて、地主神の地位と山を天神に譲ったとある<sup>18</sup>。

野尻忠によると、この話の背景には興福寺の勢力が働いているという。興福寺が11世紀末から12世紀前半における大和一円に支配を進展させていく過程で、長谷

<sup>13</sup> 文安藤民兒『消滅と再生の遊戯』金寿堂出版、2006年；楊暁捷『鬼のいる光景—「長谷雄草紙」に見る中世』角川書店、2002年；土方洋一「長谷雄卿草紙」三谷栄一編『体系物語文学史5』有精堂、1991年；脚注1村重前掲論文、脚注1脇本前掲論文、脚注2徳田前掲論文参照。

<sup>14</sup> 小松和彦・内藤正敏『鬼がつくった国、日本』光文社、1990年、117頁。

<sup>15</sup> 桜井徳太郎ほか『寺社縁起』『日本思想体系』第20巻、岩波書店、1975年、161頁。

<sup>16</sup> 道真の話は、小松和彦による神と鬼の関係の概念をよく表している。つまり、怨霊は人々が祭ることによって神となるのである。小松和彦『妖怪学新考』小学館、2000年、193頁。また、折口信夫は、荒ぶる神は鬼の部に入ると言っている。折口信夫「信太妻の話」折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』第2巻、中央公論社、1995年、283-284頁参照。

<sup>17</sup> 脚注13楊前掲書、226-227頁。

<sup>18</sup> 脚注10永井前掲書、47-48頁。

寺は11世紀末ごろ興福寺の末寺になり、外からの神、天神を受け入れる。興福寺は勢力を固めるために伊勢、春日社とも関係を持っていたが、さらに靈驗高き天神とも結びつき<sup>19</sup>、長谷寺自身も、ご利益の高い天神と結びつくことによって長谷観音の靈驗を宣揚できるわけである<sup>20</sup>。つまり、天神に祈ることは同時に長谷観音に祈ることでもあったのだ。

## 鬼造人間のレシピと信仰

『長谷雄草紙』のクライマックスの一つは何と言っても、絶世の美女は、死体から良いところを取り出して作られた人造人間ならぬ鬼造人間であったという種明かしであろう。人を作るということは、古くから神の行為の範疇に入るので、人間が生殖からではなく、人を作ることは、ユダヤ教、キリスト教やイスラム教などにおいて冒瀆的だと考えられている。それは人間を作るという行為を思いとどまらせるというわけではないが。(例えば、ホムンクルスやフランケンシュタインなどが思い浮かぶ。)日本においても、特に近世以前、神や仏に祈って子どもを授かるということは大いに信じられ行われたが、人の死体から人間を作るとなると鬼の領域となるようである。しかし、長谷雄譚の作者が鬼の人作りの伝統を考え出したわけではないだろう。当時すでにそういう俗信があり、その延長として、鬼から人を作るレシピを教わった人間も人を作ることができるのだ、と信じられていたのだと思う。

## 『撰集抄』から

人造人間の有名な説話に『撰集抄』(1250年頃成立)がある。その巻5第15話「作人形事」<sup>21</sup>では、西行が、信用できる人から鬼の人の骨を取り集めて人を作る方法を聞いて、試してみたが、手順や原料の間違いからうまくできなかった。できあがった人らしきものは色声も悪く心もないありさまだったが、殺すわけにもいかず、高野山の奥に捨ててきた。そののち京に出て、正しい作り方を聞いたが、不気味になり、もう二度と作ることはなかったという話である。その話の中で、土御門の右大臣が人を作っていたが、夢に死の国のおきなが来て、主人に許しを得ないで骨を取ってとうらめしげに言うので、怖くなってその方法を記している日記を焼いてしまった、とある。死の国のおきなとは、鬼の類ではないだろうか。鬼の長かもしれない。

<sup>19</sup> 野尻忠「与喜天神の歴史と信仰」奈良国立博物館編『初瀬にますは与喜の神垣—與喜天満神社の秘宝と神像—』奈良国立博物館、2011年、7頁。

<sup>20</sup> 横田隆志「長谷観音と天神信仰」『初瀬にますは与喜の神垣—與喜天満神社の秘宝と神像—』奈良国立博物館、2011年、12-13頁。

<sup>21</sup> 西尾光一『撰集抄』古典文庫、1977年、198-202頁。



## 陰陽聖典から

時代は下るが、安倍晴明に託されたとされる陰陽道の秘伝『篋篋内伝金烏玉兔集』（14世紀前半成立、以下『篋篋内伝』<sup>22</sup>）の序に出てくる晴明の師、伯道上人が晴明を生き返らせるのに使う術が『長谷雄草紙』の鬼の人作りと似ている。伯道は晴明の中国における師で、晴明に『篋篋内伝』を伝授する。晴明の横死を知ると日本にやって来て、晴明の12の大骨と360の小骨を集め、生活続命の法を修めて蘇生させるのである<sup>23</sup>。少し違うところは、『撰集抄』や『長谷雄草紙』の西行や鬼がいろいろな死体から骨等を集めるのと違って、伯道は晴明の骨だけを使っているところである。つまり、反魂の法であるが、伯道がどこでこの蘇生法を学んだかは記されていない。『篋篋内伝』を文殊菩薩から相伝され、天地万物の理を悟ったというから、その時に得たのかもしれない。そうだとすると、これは鬼ではなく菩薩行ということになり、「鬼神」の内の「神」の範疇に入りそうである。いずれにしても、この人作りは超自然と交わった特別な人が行っている。

## 仏教のテキストから

『長谷雄草紙』成立より後だが、広田哲通によると、仏教テキストにも鬼が死体から人を作る場面が出てくる<sup>24</sup>。地方の学問所で書かれた直談物と呼ばれるグループの中で、特に『法華経』や『阿弥陀経』の注釈書に、仏の弟子として離婆多の話が見られる。離婆多にはいくつかの名前があるが、その一つの「仮和合」という名の由来に、鬼がいくつかの死体から必要な部分を取ってきて、離婆多にくっつけて、死んだ離婆多を生き返らせるという説明がある。例えば、天台僧栄心（1475-1546）の書いた『法華経直談鈔』を引くと、離婆多がある広野の空亭で座禅をしていると、小鬼が屍を持って来て、置いて去る。その後、大鬼が来て死骸を食べようとしたところに小鬼が戻って来て、その屍は自分の物であると主張し、言い争いになる。そこで、傍らにいた離婆多に判断を求めたところ、離婆多は、屍は小鬼のものであるという判断を下す。小鬼は死体を食べるが、怒った大鬼が離婆多の手足を引き抜いて食べたので、小鬼は他の死体から手足を引き抜いて離婆多とつなぎ合わせ、唾を吐いて呪うと、離婆多は生き返る、というものである。（このエピソードの後に、人の体というのは仮のものだという説明が付く<sup>25</sup>。）

黒田日出夫は鬼の美女の素材、つまり屍の骨は、「観想のイメージ世界」を連想させると言っている。『『九相詩絵巻』に見られるような、屍、死体の観想である。

<sup>22</sup> この成立年代は、村山修一『日本陰陽道総説』塙書房、1981年、323-324頁による。

<sup>23</sup> 真下美弥子ほか「篋篋内伝金烏玉兔集（抄）」深沢徹編『日本古典偽書叢刊』第3巻、2004年、106頁。

<sup>24</sup> 脚注8 広田前掲論文、159-169頁。

<sup>25</sup> 脚注8 広田前掲論文、159-160頁。栄心『法華経直談鈔』第一巻、臨川書店、1979年、135-136頁。

肉体に対する執着から脱却するための九段階の観想であり、美女が死に、しだいに屍が膨張し、変色し、破壊し、血肉が地面を染め、腐敗し、鳥獣についばまれ、頭・手足・筋骨が散乱し、白骨だけになり、灰や土に帰するという九つの相をありありと思い浮かべるのである<sup>26</sup>」。面白いことに、骨から再生するという意味で、長谷雄の美女は九相の逆のプロセスをいく。長谷雄は女を抱いた時には屍のことは知らなかったし、女が消える時も腐敗せず骨にも返らず、水になってしまったので、観想によって肉体に対する執着から脱却するどころか、かえって後悔の念を加えて益々執着してしまう。

### ジェンダーについて

長谷雄を惑わせる美女は、一言も発さない。鬼は美女のことを、「見目も、姿も、心ばへも、足らぬ所なく思さむ様ならむ女」と言い、長谷雄は「目も心も及ばず、この世にかかる人やはあるべき」と驚き、「心ざまも懐かしく、いとど副い勝りして、片時も立ち去るべくも覚えざりけり」と思うが、肝心の女の視点からは何の叙述もない。何の叙述もないから、感情移入がしにくく、彼女が溶けてしまっても、可哀想に思う度合いも低い。鬼一般と女の肉体の関係についてミッシェル・リーが、「説話における犠牲者としての女性の描写は直ちに我々の注意を男性に向ける。女性の登場人物は往々にして男性の登場人物や彼らのチャレンジについて何かを主張するために作られる<sup>27</sup>」と言っているように、絵巻の鑑賞者は女を通して長谷雄の行動に注目する。鬼の美女は男の欲望の犠牲となったと言えるが、魂のない女の肉体は男性の性格、行動を表す導管のようなものである。絵巻の鑑賞者は長谷雄の性急な行動を非難、または同情し、ほくそえむかもしれない。人造美女といえ、ギリシャ神話のピグマリオンが作った象牙の女の像を思い起こすが、像には心がなく、動かないのに対して、鬼の美女は心ばえがよく、動作も優雅である<sup>28</sup>。長谷雄の立場から考えると、美女は男性の欲望の理想的な対象で、それが四六時中目の前にいるのに触れられないというのだから、気の毒な話である。長谷雄は欲望の犠牲者でもある<sup>29</sup>。

犠牲者といえ、絵巻の中で一番つらいのは鬼かもしれない。長谷雄を信用して託したせっかくの作品を壊されてしまったのだから。「口惜しく契りを忘れて、犯

<sup>26</sup> 黒田日出夫『歴史としての御伽草子』ペリカン社、1996年、212-213頁。

<sup>27</sup> 脚注7 Michelle Osterfeld Li 前掲書、128-129頁。

<sup>28</sup> ピグマリオンの像は女神アフロディテのおかげで人間になるが、鬼の作品は人間長谷雄のせいで、人間になれない。

<sup>29</sup> 説話と身体の研究については、Michelle Osterfeld Li 前掲書（特に第4章）；Charlotte Eubanks. *Miracles of Book and Body*. University of California Press, 2011（特に第3章）；Terry Kawashima. *Writing Margins: The Textual Construction of Gender in Heian and Kamakura Japan*. Harvard University Asia Center, 2001（特に第5章）参照。

したる故に、皆溶け失せにけり。如何許りか、口惜しがりけん」と語り手も言っている。そのうえ最後には北野天神に追い払われるのだから、誠に哀れである。哀れを誘う人間臭い鬼の心理描写は、我々に中世日本人、根本的には人間の心理行動を教えてくれる。小松和彦が言うように、鬼・妖怪の研究は人間の理解を深める「人間学<sup>30</sup>」である。

長谷雄や鬼の落胆と悔恨の原因はもちろん絶世の美女を失ったことであるが、その根底は何かと問えば、双六である。絵巻は鬼がいそいそと長谷雄を朱雀門に連れていく場面に多く紙面を割き、楼上で二人が勝負をしているところも生き生きと描かれている。双六好きの鬼が勝負に熱中している間に人間の姿から本来の鬼の姿へと本性を現すように、賭博は往々にして参加者を感情的にする。鬼は双六の勝負さえしなければ、賭け物も失わなかった訳だから自業自得と言えるし、長谷雄も女の存在さえ知らずにすんだわけである。双六は「平安から鎌倉時代にかけて、熱狂的な支持を得て、あらゆる階層の人々に愛着された」反面、しばしば禁止令が出た<sup>31</sup>。『長谷雄草紙絵巻』は北野天神靈験譚であるが、女体に対する警告、そして女の肉体を通して双六悪（賭博悪）を訓戒しているようにもとれる。

今日、優秀な学者文人は鬼と交じり合う資質に恵まれているとか、屍から人間作りをする鬼の技能を信じる人はいないだろうが、『長谷雄草紙』が面白い話であることに変わりはない。『長谷雄草紙』に基づいた小説も二編ある。一つは1993年に出版された、哲学者の梅原猛による「長谷雄の恋」<sup>32</sup>である。道真のバックグラウンドなどの情報も盛りだくさんで、「いささか心残りのことがあって死んで鬼になったのですよ、そのおかげで死体から絶世の美女を作るという術を会得できたのですよ」と鬼に言わせている。ここに出てくる鬼は落ち着いていて友好的である。そして長谷雄が80日間も美女と寝るのを辛抱したことをほめている。北野天神は出てこない。靈験譚ではないのである。

もう一つは、2001年に書かれた夢枕獏の「紀長谷雄朱雀門にて女を争い鬼と双六をする語」<sup>33</sup>。この短編小説は、イラストレーター天野喜孝とのコラボレーション作品だが、大衆に多いに受けるようなエロス描写に多くを割いている。夢枕の鬼は漢詩や芸術を鑑賞し、どちらかというとな長谷雄のコンパニオンの存在である。夢枕の美女には露虫という名前が付けられ、露虫は話すだけでなく、長谷雄の欲情を煽りたてて手を付けさせる。それは自己破壊につながるのだが。やはり、北野天神は出てこない。

両作家とも、天神の助けまたは宗教的なメッセージは現代において唐突すぎるか、

<sup>30</sup> 脚注16 小松前掲書、12頁。

<sup>31</sup> 脚注13 楊前掲書、107、117-124頁。

<sup>32</sup> 梅原猛『中世小説集』新潮社、1993年、35-58頁。

<sup>33</sup> 夢枕獏・天野喜孝『鬼譚草紙』朝日新聞社、2006年〔2001年の再版〕、61-161頁。



あまり適切ではないと思ったのだろう。現代では、Photoshop などを利用して、自分の思い通りの美女を簡単にコンピュータで作ることができる。そういう技術のなかった時代は、その理想を鬼に託していたのかもしれない。ピグマリオンにせよ、長谷雄にせよ、絶世の美女に対する欲望は、古今東西あまり変わらないようである。そして、ギャンブルがあまり奨励されないことも変わらない。

#### 付記

拙稿は、“Haseo soshi: a Medieval Scholar’s Muse” というタイトルでオーストラリアの学術論文誌 *Japanese Studies* (Japanese Studies Association of Australia. Published by Taylor & Francis Journals) に掲載予定の論文を多少変更し、日本語訳したものです。*Japanese Studies* の二人の査読者、編集長の Carolyn Stevens、Rebecca Suter、国際研究集会でご指導くださった先生方に厚く御礼申し上げます。